

2023年8月19日

筆記 岡部

夏の自主勉強会 山口西田読書会（2023年8月12日）の Protokol

【テキスト】

旧全集の第四巻、西田幾多郎「場所」四第2段落 251頁の15行目「併しかかる超越的なるものを内在化しようという要求より力の考が出て来る」から、252頁13行目「前に単に場所と考えられた空間と合一し力の場となるのである」まで。

【概要】

前回（8月5日）十分に確認していない251頁の15行目から252頁5行目までの意見交換にかなりの時間を費やした。その後、新たに読み進めた252頁の13行目までに意見が分かれるところはなかった。主な論点は次のとおり。

【論点になったところ】

・力の考

251頁15行目にある「力」は250頁の「力や物」の力と同じか。

・直覚を深める

「我々は一層直覚を深めて行くのである」「真の無の場所に近づき行くことである」とあるが、この直覚には段階があるのか。究極のものだけが直覚ではないのか。

・合理化とは

「之を非合理的なるものを合理化すると云い得るであろう、主語となって述語となることなき基体が述語化せられ行くことである」に関して「真の無の場所＝矛盾＝非合理的＝性質的なるもの＝超越的根拠＝量化できない＝述語」に対する「合理的＝主語」という組み合わせで整理しきれないことが指摘された。

「之を」が何を指しているのか正確に捉えようという試みも見られた。作用が「作用の作用」（作用を自覚する立場）の上に基礎付けられることが「非合理的なるものを合理化する」ことになるのか。「意識する意識」が「意識された意識」を基礎付けることが「合理化」であり「基体が述語化」していくことなのか。釈然としない空気が残ったまま一同沈黙。

・述語化すること

述語化することが、真の無の場所に向かうことと同義かも問題になった。

以上